

エッセイ

「元号」雑感

瀬谷 俊二郎

元号と言えば、歴史上の出来事を元号がらみで覚えたことを思い出す。

古いものでは『大化の改新』があり、近いものでは『明治維新』や『大正デモクラシー』が挙げられる。

ところが昭和となると、なぜか『昭和・』という言葉が浮かんでこない。

昭和は63年という史上最長期間を持つ元号で第2次世界大戦を挟んで国体が大きく変わった時期であり、国民も戦争と戦後の経済高度成長という大きな経験をしているので何か象徴的な元号がらみの言葉がないかと探してみたが「これは」といった言葉は見つからなかった。あまりにも大きな変革が2つも入っているのです、昭和という一つの元号をつけて表現する適当な言葉がないというところだろうか。

昭和2桁の初めのころに生まれ

た筆者は、子供のころの「戦争ごっこ」や「奉安殿のある国民学校入学」その後の「疎開・空襲・被災・・・」を経験しており、戦後の長い人生と比べてもその「戦争経験の思い出？」は決して引けを取らないくらい大きくて深いものがある。

「昭和」の由来は、四書五経の一つ書経の「百姓昭明、協和萬邦」によるとされているが、江戸時代にも全く同一の出典で「明和」の元号が制定されているのが面白いのでちょっと寄り道してみよう。

「百姓昭明、協和萬邦」は「国民の平和及び世界各国の共存繁栄を願う」意味であるが、明和では江戸三大大火（明暦・明和・文化）の一つがおきており願いと裏腹のあまり良い時代ではなかったようである。

火事は明和9年の冬のこと、火事は鎮火、再出火を繰り返しながら、2月29日〜3月1日まで燃え続け、類焼した町は934、大名屋敷は169、橋は170、寺は382を数え山王神社、神田明神、湯島天神、浅草本願寺、湯島聖堂等が被災している。

死者は14,700人、行方不

明者は4,000人を超え、老中田沼意次の屋敷も類焼したという「明和9年」は「迷惑年」であった。元号は、古代中国の前漢の武帝の時代に始まった制度で皇帝の時空統治権を象徴する称号であり、日本では大化の改新時(645)に使用が始まり、以降「日本」という国号の使用も始まったといわれている。

『大化』から『令和』まで日本では248の元号が使われているが、採用された漢字は意外と少なくわずか73字であり「永」「天」「元」「治」「応」「和」は20回以上使用されており「令」「成」「昭」はそれぞれ初めて採用されたものである。

筆者は9月の例会で「江戸を吟味する」という演題で話をするのになつており、レジュメ制作の都合上、江戸関連の本を読む機会が多くあったため「元号を伴う多くの出来事」を学ぶことになった。先の「明和」もその一つであるが、慶長7年(1603)から始まった江戸幕府は1615年の元和を皮切りに1865年の慶応まで35の元号を持っている。ここで年号絡みの主な出来事を

列挙してみると次のようになる。

- 元和・・・元和偃武
 - 寛永・・・寛永寺、寛永通宝
 - 慶安・・・慶安の変
 - 明暦・・・明暦の大火
 - 貞享・・・貞享歴
 - 元禄・・・元禄文化
 - 宝永・・・宝永地震、宝永大噴火
 - 正徳・・・正徳の治
 - 享保・・・享保の改革、享保の大飢饉
 - 寛延・・・寛延通宝
 - 宝暦・・・宝暦事件
 - 明和・・・明和の大火
 - 天明・・・天明の大飢饉
 - 寛政・・・寛政の改革
 - 文化・・・文化の大火
 - 天保・・・天保の改革、天保の大飢饉
 - 嘉永・・・嘉永の黒船
 - 安政・・・安政の大獄、安政の大飢饉
 - 慶応・・・慶応の改革
- 「元号のつく出来事はそれを見ただけで、それと関連した人物や環境・事件等を連想することが可能であれば引き出しの把手のようなものではなからうか？」と某氏に話したところ、「それはそうだが、その話の前提としてまず引き

出しの中に連想を導き出せる十分な知識の蓄積とある程度の想像力がなければならぬのではないか」との返事を得た。

このことから、元号はあくまで日本独自の紀年であり、国外では通用せず外国人には理解され難いものであり、国内でも元号（殆どが西暦年度の途中から始まる）を

使わず西暦で時期を処理している人には不適切なものであることがわかった。

ということ、元号は日本史絡みで、特に歴史好きの面々には便利なツールであり、お互いの「意味疎通」にも有効に働くので仲間内では大いに活用しようという落ちになった。